

## The Epidemiological Research Training Course VI-2 Recommendations for Future Courses

August 13, 2015

Minami-aizu Public Health Center, Fukushima Prefecture  
Director, Yumiko Kanari

Strategies listed below is drawn from my observation and interviews with 6 participants. The details are described in Japanese from the second page. Separate English evaluation reports will be uploaded later on.

### English Summary

#### Teaching methods

- Wider and more strategic announcement of the course is recommended.
- Need to specify the core target of the course as the number of participants increases.
- For responding to participants' varying backgrounds and needs, it is worth trying party dividing them into several sessions (e.g. basic and advanced sessions, clinical and public health session).

#### Course management

- In future courses, the course should be mainly taught by the Vietnamese side with supervision from the Japanese side.
- It is recommended to introduce a systematic approach to recruit participants to supporting and teaching of the subsequent courses.
- Opening a Q&A page in the project website will facilitate improvement of teaching skills of the Vietnamese instructors and lessen teaching workload at the same time.
- Continue teaching of risk management as a characteristic of the course co-organized by Fukushima Medical University with a rich experience in the field.
- Continue recruiting students and young doctors to participate as an international exchange activity and deepen their understanding of global health.

## The Epidemiological Research Training Course VI-2 参加者個別インタビュー概要と提言

2015年8月13日  
福島県南会津保健所  
保健所長 金成由美子

### 提言の要約

#### 研修で教授方法について

- ・ 現状のロコミに頼らず、より広く開催案内をする。
- ・ 参加者増加にともない、ターゲット（中堅層）をより明確化する。
- ・ 参加者の多様なニーズに応じて、一部分をフォローアップコースと基礎コース、臨床コースと保健衛生コースに分ける試みを行う。

#### 研修の運営体制について

- ・ いずれは、ベトナム人指導者が主に指導し、日本人指導者はその指導者に対し助言、フォローするという形でのサポートをしていく形式での継続が望ましい。
- ・ 過去の参加者が研修をサポートするリレー型連携がとれるような仕組みづくりも、将来的に考えるとよい。
- ・ 本事業のサイトに Q&A ページを開設することにより、現地側の指導スキル向上と、指導者の負担軽減を図る。
- ・ 被災した福島県だからこそできるリスクマネジメント視点を取り入れた内容も、本研修の特徴として継続する。
- ・ 学生や若手医師の参加を募り、国際交流とともに、国際保健の理解促進につなげる。

※以下、提言の要点は赤字で示した。

### 1 参加者個別インタビュー概要

#### (1) 実施日

2015年8月6日（木）

#### (2) 対象者

- ・ 医師6人（医学生2人を含む）
- ・ コース内訳： Audit コース4人、Project コース2人
- ・ 参加回数による内訳： 1回目2人、2回目3人、3回目1人

#### (3) 概要

- ・ 研修会開催を知ったきっかけや参加理由は研修講師や企業からの勧めによるものであった。
- ・ 昨年の研修に参加し、今回2回目もしくは3回目の参加者からは、「前回は理論的であり、今回は実践的であった」「前回理解できなかったところが、今回で理解が深められた」などの意見が出された。
- ・ 期間については、5日間の日程について丁度よいという意見はある反面、3日間程度であったら参加できるという人がいるという意見があった。

- ・ 「1回で全てを理解できるものではなく、くりかえし受講することで理解が深まる。」とし、今回の研修が理解のスタートととらえている部分も見られた。
- ・ 理解を深める上で、初回受講した後1年間の間隔ではなく、半年後位に次の研修があるとよいという意見もあり、研修から学んだことを実践する上で、その確認のための機会として早い段階での復習機会を望んでいると思われた。
- ・ 参加者の中には指導的立場の人もおり、自分が学ぶだけではなく、指導方法を学んだという意見もあった。
- ・ 行政機関で住民の健康管理に関わる医師からは、最終日の福島オープンセミナーにおいて、災害に対するマネジメントがとても勉強になったとの意見があった。
- ・ 本研修では、取り上げる研究テーマが臨床系となるが、公衆衛生系の研究テーマでのプログラムを望む意見もあった。

## 2 個別インタビューを実施しての感想と、研修の運営方法と内容についての提言

### (1) 参加者について

- ・ 参加者に医学生や研修医が含まれており、インタビューした学生からは真面目さ、意識の高さがうかがえた。その反面、もともとターゲットにしている中堅層と学生とを一緒にすることでデメリットはないのか検討すべきではないかと考える。
- ・ 参加者数が年々増加し、1回の研修でこれ以上の参加人数に対応すること難しくなる可能性がある。その場合には、学生の参加は限定し、**ターゲット層を優先的に参加**させる必要がある。

### (2) 開催案内、PR等について

- ・ インタビューした参加者全てが個別の紹介により研修会を知っている状況であり、**広く広報**できる方法を検討する必要があると考える。

### (3) 開催頻度、地域等について

- ・ 本研修に要望したいこととして、**回数や地域の拡大**があればうれしいとの意見もあったが、日本人講師の対応が難しいだろうと強い要望として出さないという感じが見られた。

### (4) 研修の組み立てについて

- ・ 繰り返し参加したいという声が一様に聞かれた。年々、参加者が増加する可能性があり、参加者数の調整等が必要となってくる可能性がある。
- ・ 頻回参加者は**フォローアップコース**、初めての参加者等は**基礎コース**というような形態も考えられるのではないか。

### (5) 保健衛生、リスクマネジメントについて

- ・ 行政機関勤務の医師から保健衛生部門のプログラムの提案もあった。**臨床コース、保健衛生コース**という日を設けるなどの工夫も興味深い。

### (6) 福島オープンセミナーについて

- ・ 福島の状態を発信するということで捉えていたが、**リスクマネジメント**の実例として必要な研修項目の位置づけであると感じた。

### 3 運営体制についての感想と、事業の今後の展開に向けての提言

将来的に運営をベトナム側が中心となって行っていく必要がある。日本からの技術協力により立ち上がったものが、ベトナム側自身で継続、運営できるようにしていかなければならない。しかし、それは手を放すのではなく、日本が見守りをする関係性と連携を維持しておくことも必要ではないかと考える。将来的にそのようになっていくために、研修の形だけではなく将来の運営体制も考えて計画を作っていく必要があると考える。

#### (1) ベトナム人講師の育成とバックアップ体制

(現状)

- ・ 以前の参加者が講師になるなど育成がみられている。
- ・ 振り返り会議においても、本研修参加者の成功ストーリーにあげられるように人材が育成されていると思われる。
- ・ 研修への参加者の評価は高く、研修の継続と拡大開催等も期待されている。

(今後)

- ・ 研修の展開にあたっては、日本人指導者が自ら行う量には限界があることから、ベトナム人指導者の位置づけがさらに重要となる
- ・ ベトナム人指導者を増やすことにより、研修の拡大（参加人数、場所）の検討も可能となる。
- ・ 本研修の参加者から講師となる人を積極的にリクルートし、育成を図っていくことが大事ではないか。
- ・ **いずれは、ベトナム人指導者が主に指導し、日本人指導者はその指導者に対し助言、フォローするという形でのサポートをしていく形式が望ましい。**
- ・ これは、日本人指導者が助言、フォローすることにより、さらに日本人指導者のレベルアップにつながるものと考えられる。
- ・ ベトナム人医師向け疫学研修と指導者育成の併用から、日本側プロジェクトとしては、将来的には指導者育成プログラムへのシフトということもあるのではないかと考える。

#### (2) 研究の実践サポート

(現状から)

- ・ プロジェクトコースとして実践の支援を行っており、論文が掲載されるなど成果が出てきている。

(今後)

- ・ 本事業のサイトに **Q&A ページ**を作成するメリットとして、以下が考えられる。
  - 参加者の疑問に答えるフォローアップ体制があることで理解が深められる。
  - 他者の質疑を Q&A 掲示板で見ることにより自分の疑問を整理でき、具体例により理解が深められる。
  - 定番の質問が Q&A として掲載されることで、対応側の負担も減少する
  - 掲載する答えをつくることにより、講師側のスキルアップになる
- ・ ホーチミン市医科薬科大学や医師会等において、過去の参加者がプロジェクトを実施する上でサポートする **リレー型連携**がとれるような仕組みづくりも、将来的に考えるとうよい。

### (3) 住民の健康管理、リスクマネジメントの視点

- ・ 臨床医だけではなく、保健衛生医に対する支援は、ベトナムの地域の健康水準の向上に大きく寄与するものと思われる。
- ・ 被災した福島県だからこそできる**リスクマネジメント視点を取り入れた研修**も特徴となり得るものと考ええる。

### (4) 国際交流、国際保健の理解促進

(現状から)

- ・ 本研修には、日本からも受講者が参加し、一緒に学習することにより疫学・統計の理解を深めるとともに、受講者の国際的理解と交流が図られている。
- ・ 日本人と一緒に学習することにより、二か国共同で実施している感覚が強く感じられているのではないかと考える。

(今後)

- ・ **学生や若手医師の参加を募る**ことは国際交流とともに、国際理解、さらには、将来的な指導者等の育成につながっていくと思われる。
- ・ 学生や若手医師の参加については、自費参加も含めて広く募集することもよいのではないかと（上限人数設定はあり）。

### (5) 福島県の情報発信、理解

- ・ **福島県の情報発信する機会を継続する**ことは福島県にとって重要であると考ええる。
- ・ 福島県の風評払拭ということだけではなく、被災した福島県だから発信できる、また、学習の素材となる情報を提供できるものと考ええる。